

大平正芳記念財団レポート

第39回「大平正芳記念賞」・第37回「学術研究助成費」



令和5年6月12日（月）、財団合同役員会のあと正午から、100名の参加者のなか「第39回大平正芳記念賞」「第37回環太平洋学術研究助成費」の授賞式が東京 ホテル・グランドヒル市ヶ谷で行われました。

授賞式は、宇野重規先生の挨拶、次に末廣昭・運営選定委員長より選考過程の説明と選評の後、「大平正芳記念賞」を石井由梨佳氏（防衛大学校准教授）ほか9名の方々に、「環太平洋学術研究助成費」を森万佑子氏（東京女子大学准教授）に授与されました。続いて授賞者を代表して石井由梨佳氏が謝辞を述べられました。その後、平将明議員の挨拶と乾杯のあとパーティに移り、各授賞者を交えての歓談となり、盛況裡に午後2時過ぎお開きとなりました。

2023（令和5）年 9月発行

大平知範理事長の挨拶

久方ぶりの授賞式でございます。

皆様には、ご多忙の中、ご出席をいただき、誠にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。コロナ禍にあって、ここ3年ほどは、受賞者のみを対象とした授賞式といたしておりました。新型コロナウイルスも5類へと移行いたしておりますが、これまでより人数を少なくしての開催とさせていただきます。

この授賞式も39回を数え、来年は、いよいよ40回という節目を迎えますが、これも今回ご出席いただきました皆様を始め、多くの方々のご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

この間、当財団は、内外の若手研究者、学者の方々299名に記念賞ならびに学術助成費として総額3億円強を授与、若い方々を中心に学会等への登竜門としての役割を果たしてまいりました。また、昨年10月には、当財団より、『大平正芳とその政治再論』を刊行し、尾崎行雄記念財団より、「^{がく}罎^{どう}ブック・オブ・ザ・イヤーズ2022」で「国政部門」の「大賞」をいただきました。また現在、川島真東京大学教授を中心に「1970年代の日中関係の展開と大平外交」をテーマに本年9月の出版を目指して編纂をいただいている最中でございます。小さい財団ではございますが、これまで通り大平正芳の残した政治思想の普及と顕彰に努めてまいります。岸田文雄首相率いる宏池会においても、大平正芳思想を研究・継承

していると伺っております。

また、今回は、東京大学の宇野重規教授に記念スピーチをお願いいたしております。

「大平正芳記念賞」及び「環太平洋学術研究助成費」を授賞した書籍、研究は、本年度もまた非常に充実した内容のもので、末廣昭委員長よりご紹介がございますが、受賞されます方々の多年のご研鑽に敬意を表したいと存じます。

以上、簡単ではございますが、皆様には、当財団への変わらぬご指導・ご鞭撻をお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。



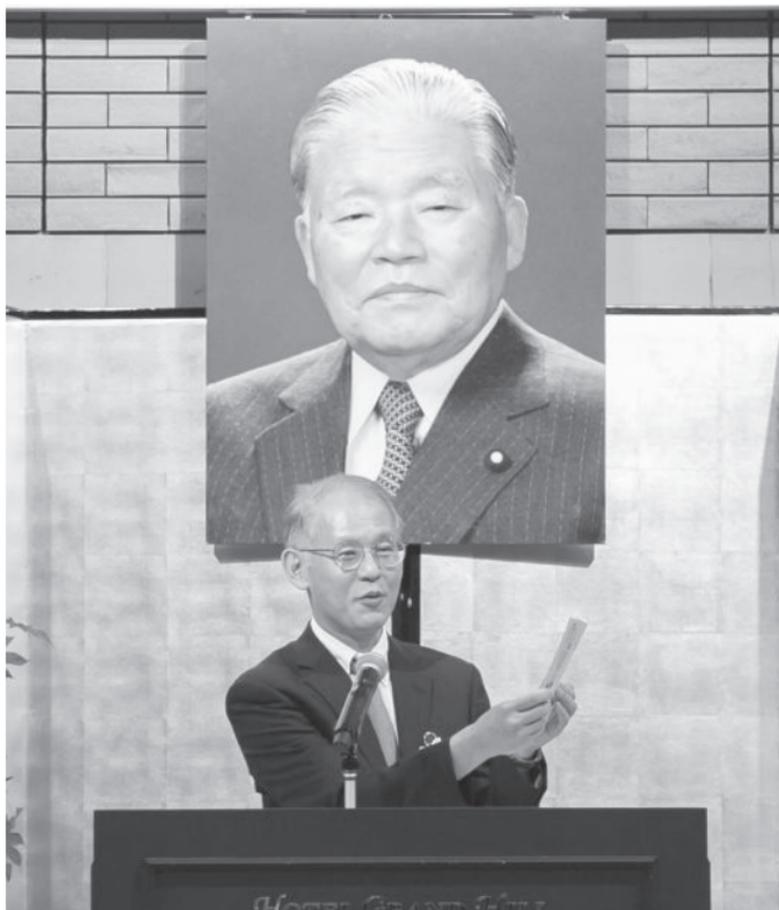
宇野重規先生のご挨拶

この度は、大平正芳記念賞を受賞されたすべての先生方に、心よりお慶び申し上げます。おめでとうございます。

なぜ私がここに来ているのか。NIRA というシンクタンクがございしますが、『大平正芳とその政治 再論』という本で、ここの理事として座談会に参加いたしました。また、『日本の保守とリベラル』という本では、一章分を「大平総理の政策研究会」について割いております。そのような関係で、本日はこの場を与えていただきました。

本日、6月12日、いまから43年前になります。この日のことを私は非常によく覚えております。大平正芳元首相が亡くなられた日です。決して早熟な子供ではなく、政治のことなどあまり考えることがなかった私にとって、強く記憶に残っているのが、1980年6月12日でした。朝、たまたま6時くらいにテレビのニュースをつけた瞬間、飛び込んできたのが、大平正芳首相が亡くなられたという衝撃的なニュースでした。選挙戦でのお疲れもあり、志半ばにしてのご逝去でした。現役の首相が亡くなるということは、全く経験がなかったことで、何かすごく大変なことが起きているのじゃないかと、その時、強く感じたことを今でもよく覚えております。因みに申し上げますと、明日6月13日は、私の誕生日で、毎年毎年、自分の誕生日になると、前の日に大平首相が亡くなられた日だということを思い出します。そして、今日もその6月12日という日にこのような場でお話させていただくことを、非常に運命的なものを感じております。

しかし、これは、単に首相在任中にお亡くなりになったということだけではありません。大平首相という方は、首相になる前に、大変な時間をかけて準備された方です。ただ首相になればいいのではない。首相になったら、自分はこういう



ことをやりたいんだ、ということを経年にもわたり考へていらした。特に私にとって興味深いのは、大平首相が若い世代、つまり当時まだ30代あるいは40代になったくらいの若い研究者、例えば、香山健一さん、佐藤誠三郎さん、あるいは、公文俊平さん、といった皆さんを集めて議論を交わすことを非常に楽しみにされていたことです。文明論を軸に、日本が今後どうなっていくのか、世界が今後どうなっていくのか、これらを議論して考えた上でつくったのが、「9つの政策研究会」です。その「9つの政策研究会」の提言書は、一部まとまったものもあるのですが、全てまとまる直前に大平首相は亡くなってしまいました。その無念たるや、いま想像しても、心

に迫るものがございます。

大平首相は何を考えていたのでしょうか。大平首相は、「いま日本は大きな転換期にある」というように感じていらっしやいました。大平首相は、1978年暮れに首相になるので、1979年、80年が在任期間となるわけですが、これは本当に世界的な大転換の時であったと、今にして思います。例えば、1979年。イランではホメイニ革命が起きます。当時、我々は、これがどれだけ意味があるかよくわかっていませんでしたが、いまにして思えば、世界的なイスラム復興の火がついたのが1979年です。同じ年、ソ連のアフガニスタン侵攻。これに対する抵抗勢力などから現在のイスラム原理主義運動が始まっています。つまり、イスラム運動、あるいはより広く宗教というものが世界を揺り動かす、こういう時代が1979年に始まったのです。同じ1979年、イギリスではサッチャー首相が改革を開始します。のちに新自由主義改革と言われるような、まさに市場の時代、この改革が始まったのが1979年です。また、中国では改革開放路線が本格化するののが1979年であります。鄧小平さんが日本にやってきました。その中で、中国という大国が資本主義に向かって動き出したのも1979年です。新自由主義、資本市場社会がますますグローバル経済に向けて加速する一方で、宗教という問題が大きく浮上してくる。また、1979年、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、祖国ポーランドを訪問します。そして、ポーランドでは改革運動が加速し、1989年、社会主義体制が崩壊します。要するに、1979年は、世界でそれまでの米ソ冷戦体制が崩れ、そのあとの時代は、あるいは新自由主義、あるいは宗教と、こういったものが世界を動かしていくに違いない、いまから思えば、そういう大きな転換点だったのです。このことは、ジャーナリストのクリスチャン・カ ril という人が、『すべては1979年から始まった』（北川知子訳、草思社）

で述べています。

まさに大平首相は、それを感じていらっしゃったのでしょう。日本は大きく変わっている、世界がいま変わっている。ここで日本はいったい何を選ぶのか。日本の国家の使命はどこに向かっていくか。大平首相が繰り返し言っていたのは、これまでは経済成長、それだけに集中していればよかった。しかしいまや日本は、経済成長を乗り越えた後、新たな国家の目的、目指すべきものを見定めなければならない。経済至上主義だけではなく、文化の時代、あるいは都市と地域が乖離するのではなく田園都市の時代でなければいけない。こういった問題意識を大平首相は明確にもっていました。それから40年以上が過ぎました。果たして、大平首相の思いが実現したのでしょうか。本当に我々は経済成長だけではなく、文化というものを本当に大切に作る国に日本はなったのでしょうか。都市と地方が単に対立するのではなく、この二つを結びつけることによって、新しい生き方を日本人が目指すべきだという、その大平首相の思いは実現したのでしょうか。

1980年、田中康夫さんの『なんとなく、クリスタル』という本が出たのがこの年でした。この本は面白い本なのですが、一番最後の註に人口問題を挙げておりました。何と書いてあるかというと、「日本はこれから人口減少へ向かう」なのです。1980年の時点で、このことはわかっていたわけです。当たり前です。すでに合計特殊出生率は人口の置換水準を下回っていたので、いずれ日本の人口は低下する。もうこのことは、1979年、80年には明らかだったのです。しかし、結局、40年以上たちますが、日本社会はこの問題に対して、根本的な手を打つことはできませんでした。そしていま、岸田政権のもとで、新たな子育て対策が行われようとしています。つまり我々は、大平首相が考えた大切なこと、「日本は

これからどういう国になるのか」「世界でどういう役割を果たすのか」「日本の国としての再定義をし、それに向けて、やるべき改革をしていかなければならない」ことについてまだ答えを出していないのです。そうした大平首相の思いは、1980年6月12日に、潰えたわけではありますが、この思いを、いまこそ私たちは継承しなければいけないと強く思います。その意味で、6月12日、この場でもう一回、大平首相の残された遺徳を偲んで、大平首相が我々にいまなお訴えかけている強いメッセージを受け止め、今後の日本と世界を考えていければと思います。本日は本当におめでとうございました。

宇野重規：

東京大学社会科学研究所教授、NIRA 総合研究開発機構理事。専門分野は政治思想史・政治哲学。第29回サントリー学芸賞。近著は『民主主義とは何か』（講談社現代新書）。昨年出版の『大平正芳とその政治 再論』（PHP エディターズ・グループ）の座談会にご出席いただき、ご寄稿もいただいています。

2022年度、第39回大平正芳記念賞の 選考結果について

運営・選定委員会委員長 末廣 昭



2022年度(令和4年)の第39回大平正芳記念賞は、自薦他薦合わせて計30点の本が寄せられ、2022年10月から2023年1月までの計4回の選定委員会における厳正な検討の結果、後述する6点(特別賞2点を含む)に決定した。また、第37回環太平洋学術研究助成費も決定した。今回の受賞作のうち石井氏、庄司氏、長氏、高橋氏の作品は、いずれも現在の緊迫する国際情勢と日本の今後の行動指針に密接に関係するだけでなく、「地球社会時代」を提唱し、「環太平洋連帯」を訴えた大平元首相の思想と行動にも深く関係する著作であった。また、湯川氏の作品と特別賞の対象となった太田氏たちの翻

訳書は、現代の国際政治や国際関係を見ていく上で多くの示唆を与える歴史分析である。そして、学術研究助成の対象となった森氏の研究企画は、「太平洋国際関係史」という新しい視点を提唱しているという点で、これまた大平正芳記念賞にぴったりの研究計画となっている。大平正芳記念賞にふさわしい優れた作品を刊行された著者のみなさんと出版社の方々に、心より敬意を表したい。なお、選考に携わった委員は次の7名である。

末廣昭(委員長、東京大学名誉教授)、総括、東南アジア経済
青山和佳(東京大学教授)、文化人類学、宗教社会学、東南アジア社会

金子芳樹(獨協大学教授)、国際政治、東南アジア政治

川島真(東京大学教授)、アジア外交、中国・台湾

木村福成(慶應義塾大学教授)、国際経済、アジア太平洋地域の経済

久保文明(防衛大学校校長)、アメリカ政治、日米関係

黒崎卓(一橋大学教授)、開発経済学、南アジア経済

以下、授賞作6点と学術研究助成1件について、その作品の意義と授賞理由について簡単に紹介しておきたい。

~~~~~

### 石井由梨佳『Japanese Maritime Security and Law of the Sea』(Brill, 2022年)

本書は、日本の海上安全保障と海洋法の変遷を、国際法の立場から論じた研究書であり、いま日本が直面している安全保障の問題と密接にかかわるテーマを取り上げている。本書では、領海、海峡、領空の防衛に関する日本の権利と義務について、3海里幅の領海設定や海洋権益、北方領土や尖閣諸島の問題など、具体的な問題をとりあげて議論していく。そして、これらの諸問題をめぐる議論を通じ、いわゆる「一方的平和主義」が日本の海上安全保障法制をどのようにゆがめて

きたのか、それが国際法制との間でどのような乖離を生んできたのかを、国際法学の視点から詳細に検討していく。

国際法学の専門書であると同時に、日本の海上安全保障法制の形成に関わるさまざまな出来事とそれによって喚起された政治過程を詳細にレビューした研究書としても秀逸であり、同時に、日本が今後進むべき方向性を示した点でも重要である。「アジア太平洋」の最も重要な問題のひとつを正面から論じた書として、大平正芳記念賞にふさわしいと判断した。

~~~~~

庄司智孝『南シナ海問題の構図—中越紛争から多国間対立へ』(名古屋大学出版会、2022年)

この本もまた、現在のアジア太平洋で生じている重要かつ深刻な問題、すなわち南シナ海問題を正面から取り上げている。この問題はこれまで中国の側から描かれることが多かった。本書の特徴は、南シナ海問題の当事者であるベトナムとフィリピンの2つの国、とりわけ著者が長年研究に従事してきたベトナムを事例として取り上げ、冷戦後のベトナムの外交と安全保障政策の観点から論じている点である。ベトナムがこの問題にどう対応してきたのか、単に具体的な対応過程の紹介だけでなく、ベトナム語資料も駆使しながら、政策決定過程やその背後に存在する思想にまで掘り下げて検討している点は高く評価することができる。さらに、この問題が中国・ベトナム間の二国間の対立関係にとどまらず、機構としてのASEAN、さらには日本、オーストラリア、インド、欧州をも巻き込んで、「多国間対立」へと発展していく過程を説明した点も重要な貢献であろう。

今後、ますます重要度を増すであろうアジア(インド)太平洋地域、その海洋安全保障について、多角的かつ複眼的視点を提供しているという点で、大平正芳記念賞にふさわしい作品と言える。

長史隆『「地球社会」時代の日米関係—「友好的競争」から「同盟」へ 1970-1980年』(有志舎、2022年)

本書の内容を示すキーワードである「地球社会時代」と「日米同盟関係」、この2つの言葉を最初に使用したのは、じつは大平元首相であった。その意味で、本書が描く1970年代の日米関係は、大平元首相の思想と行動とも深く関係している。ニクソン米大統領の突然の訪中（ニクソンショック）で幕を開けた1970年代は、資源確保のために展開した独自外交（中東など）や深刻化する対米貿易赤字問題など、日米関係にとって協調よりは対立が目立つ時期であったが、意外と研究蓄積はない。そうした中で、この時期の日米関係を安全保障や貿易摩擦という切り口だけではなく、グローバルな視点に立って、社会・文化的視野も含めながら分析した点に、本書の特徴がある。

とくに、日本の外交力を低く見ていたキッシンジャーが、どのように日本観を変えていったのか、キッシンジャーと大平の間の会談がどういう影響を与えたのか、また、今日の日米「同盟関係」はどのようにして形成されたのか、そうした論点を提示し検討していった点が興味深いだけでなく、本書は現在の日米関係を理解する上でも不可欠の研究となっている。研究テーマを含めて、大平正芳記念賞にふさわしい作品と判断した。

湯川勇人『外務省と日本外交の1930年代—東アジア新秩序構想の模索と挫折』(千倉書房、2022年)

本書は1930年代に日本外務省が直面したジレンマ、すなわち、一方で東アジア新秩序の建設、他方で対英米外交関係の維持という、方向性のまったく異なる2つの外交路線をどのように両立させようとしたのか、あるいは両立に失敗してきたのかを、公式の外交文書や当事者の日記・回想録だけでなく、当時の講演記録など膨大な資料を駆使して検討した労作である。従来、この問題については、臼井勝美氏が1971年

の論文で類型化した外務省の中の3つの派閥、いわゆる、①欧米派、②アジア派、③革新派の3類型に沿って、外交路線を対比させるのが一般的であった。著者は白井氏の3類型を継承しつつも、主要な外務大臣や次官(幣原、広田、重光、有田、佐藤など)の言動を詳細に検討し、例えば、同じ有田八郎の場合でも、時期によりイッシュウにより、立場や方針が変わっていく様子を説得的かつ克明に描いた。また、この時期重要な意味をもつ経済外交について、外務省や外交官の認識と対応を検討している点も、本書の大きな貢献である。

対東アジア関係の維持・強化と対米関係の維持・強化をどう両立させていくのかは、その後の日本の外交において根源的な課題となる。この問題について実証的な研究を進めた本書は、日本の今後の外交路線を検討する上でも示唆に富んでおり、大平正芳記念賞にふさわしい著作と言える。

~~~~~

**太田淳・長田紀之監訳、青山和佳・今村真央・蓮田隆志訳『世界史のなかの東南アジア—歴史を変える交差路』(名古屋大学出版会、2021年)**

翻訳書を授賞作に推薦するためには、まず原著そのものの研究水準が高くなければならない。次いで、翻訳書の方も、単に翻訳が正確であるだけでなく、原著のもつ特徴を日本の読者に伝えるための創意工夫がなされていることが要請される。それだけ評価のハードルは高くなるが、本翻訳書はその要請に見事に応えた作品となっている。

原著の著者であるアンソニー・リード氏は、『商業の時代の東南アジア 1450-1680年』の本で、大航海時代の東南アジア史像を塗り替えた。今回の原著も、従来の通史のように王朝年代記的な記述ではなく、経済活動、国家の仕組み、ジェンダーなどテーマごとに章を立てて、紀元前から21世紀までの東南アジアを描き切るという画期的な構成となっている。

ところで、この原著は相当専門知識がある読者でもそう容易に読める本ではない。膨大な数の王国名、地名、人名、事件

名が出てくるうえに、著者独自の概念もたくさんでてくるからである。記者たちは、読者の理解を助けるために、巻末や本文の中に適宜、簡にして要を得た注記を付けると同時に、例えば、Peasantization には、「農民化」ではなく「農民の非自律化」の訳語を与えるなど、翻訳にもさまざまな工夫を施している。私が専門のタイの記述を見ても、訳語や人名はきわめて正確であり、記者たちのみならず、日本における東南アジア歴史研究の蓄積が総動員されているとの印象をもった。特別賞としてその仕事を顕彰した理由である。

~~~~~

高橋伸夫『中国共産党の歴史』(慶應義塾大学出版会、2021年)

2021年の中国共産党設立100周年に合わせて、中国共産党に関する本が日本でも多数刊行されたが、本書はそれらの中でも最も秀逸な著作のひとつに数えることができる。著者も述べているように、中国共産党の100年の通史を一人の人間が書き上げる作業は、容易でないだけでなく、「無謀」な試みである。なぜなら、関係する歴史文書の多さに加えて、公表されている党の正史は政治的に粉飾されている可能性が高いからである。にもかかわらず、著者が果敢に100年史に取り組んだのは、米国などに流出した新史料なども活用して、「ひとつの物語」として描きたいという強い意思が働いたからであった。実際、本書には、日本でこれまで紹介されてきた中国共産党や毛沢東の描きかたとは異なる記述が随所に出てくる。有名な「長征」は逃避行と位置付けられ、毛沢東期の「革命」の暴力性も赤裸々に描き出している。とりわけ、第二次大戦後の毛沢東と鄧小平の時代の記述は、著者独自の研究成果を反映させた部分であり、工夫を凝らした文章と併せて、読み応え十分である。ただし、毛沢東時代には舌鋒鋭かった著者の分析も、リアルタイムの習近平の時代となると、迷いの文章も見られる。同時代の中国の実像を把握することの難しさを感じた。

中国共産党理解は目下、日本の、そして世界の大きな課題となっている。その意味でも本書の刊行の意義は高く、大平正芳記念賞にふさわしい著作と判断した。

~~~~~

### 第37回環太平洋学術研究助成費

#### 森万佑子『「小国」の勲章外交—琉球・ハワイ・大韓帝国』

今回は環太平洋学術研究助成の趣旨にぴったりのテーマを掲げた研究が申請され、満場一致で採択した。申請者の森氏は、『朝鮮外交の近代—宗属関係から大韓帝国へ』(第35回大平正芳記念賞受賞)や、『日韓併合』(中公新書)など、水準の高い研究業績を次々と刊行しており、近現代アジアの国際関係史研究を牽引する若手研究者の一人である。

今回の研究企画は、東アジア外交史という枠組みを超えて、「太平洋国際関係史」という新たな視点から、大国に併合される小国に共通する特徴を抽出することを課題とする。具体的には日本に対する琉球、中国・日本に対する大韓帝国(1897-1910年)、米国に対するハワイの併合事例を取り上げる。魅力的なテーマ設定だけでなく、利用可能な資料などについても、事前調査が行き届いており、質の高い研究成果を期待することができる。また、「太平洋国際関係史」というアプローチは、大平元首相の「環太平洋連帯構想」を発展させるうえでも示唆に富んでおり、「環太平洋学術研究助成」にふさわしい研究企画と判断した。

## 受賞の言葉

〔大平正芳記念賞〕



受賞作

### 『Japanese Maritime Security and Law of the Sea』

いしい ゆりか  
石井 由梨佳

(防衛大学校人文社会科学群国際関係学科准教授)

この度は、歴史と伝統のある大平正芳記念賞をいただくことができ、大変光栄に存じております。私どもの取り組みをこのような形で評価いただきまして、心より御礼申し上げます。大平正芳記念財団の関係者の皆さま、選考委員の先生方、そしてこれまで研究を支えてきてくださった皆さまに、感謝申し上げます。

大平元首相が提唱された環太平洋連帯構想は、今日形を変えながらも、一層重要性を増しています。「形を変えながら」と申し上げましたのは、1970年代末当時に構想されていた

ように、グローバル化と相互依存によって、自由で安定した国際秩序をつくっていくことは難しいということは明らかだからです。ロシアによるウクライナ侵攻が続いておりますが、これは自由で開かれた国際秩序に対する挑戦です。このように法の支配が危機に晒されている状況が続きますと、短期的にはモラルハザードが生じかねませんし、長期的には各地で法に対する信頼が揺らぐことが懸念されます。アジア地域に限りましても、地政学的な競争が顕在化していることは申し上げるまでもございません。

もっとも日本は一貫して法の支配に基づいた国際社会の形成を主導してきた立場にありました。そして、民主主義や基本的人権といった価値を、普遍的なものとして擁護してきました。そのことの重要性は、一層大きくなっているとも言えるでしょう。

私の著書は、第二次世界大戦後、日本政府が独自の海洋安全保障政策と海洋法の解釈を展開してきたことを、主に日本政府の国内法および国際法へのアプローチを実証することで示したものです。日本は東アジア地域において地政学的に鍵となる位置にあります。冷戦終結以降、米国の軸足が他の地域に移り、東アジア地域における緊張が高まったことを背景に、日本は2000年代以降、海上保安法制と有事法制を拡充させてきました。また、国際社会における海洋法の発展を受けて、国連海洋法条約等を実施するための国内法制を整備してきました。

しかしそれらの国内法制は日本が国際法上有している権益をそのまま実現するものではなく、独自の政策的考慮に基づき海上保安庁や自衛隊の権限を制約するものでした。その結果、海上における力の行使を規律する国内法制は構造的に安全保障上のギャップを残すものになっています。また、日本は特に海峡、島、排他的経済水域と大陸棚の重複海域に関しては他国とは異なる対応をしています。これらの対応が他国との関係において意図せざる効果をもたらさないかは、慎重な検討が必要であることを指摘しました。

---

同時に、日本は包括的な海洋法秩序を追求してきました。冷戦期にシーレーンを確保するために関係国と協力してきたこと、マラッカ海峡やアデン湾における海賊対処のために途上国を支援してきたこと、自由で開かれたインド太平洋構想を打ち出してきたことなどがその一例です。本書ではそのことを踏まえ、日本の海上保安法制の形成過程を明らかにし、その意義を評価することを試みました。

海洋法分野に限らず、各国が協力しあわなくてはならない課題はますます明らかになっております。このような国際的な状況を鑑みると、我々研究者が、学術的な立場から、どのような取り組みができるかということを考えざるを得ません。シンプルなようでいて、答えが非常に複雑である問題に取り組む上では、一過的な事象に捉われることない、地道な基礎研究が必要です。

今日ご受賞されました庄司智孝先生とは、あるプロジェクトで、フィリピンの実地研究に行ったことがございます。その時、庄司先生が仰っていた言葉で、非常に印象に残っているのが、「それぞれの国や社会で、現地の人が使っている言語や文化がある。地域政治研究ではそれらを学び、その中に入って研究を進めていくことが必要だ」というものです。こうした研究を実現するためには、一人でできることは限られており、かつ一朝一夕には叶わないことがございますが、長期的な視点で研究を蓄積していくことが求められましょう。また同時に、新しい事象が次々と生じていく中で既存の枠に捉われない自由な発想が必要とも考えます。社会科学では一見違うように見える問題が、実はつながっているということがしばしばございます。そうした多面的な異なる視点からの検討も必要だと考えています。

この受賞を励みとしまして、今後もその一端を担っていただけるように精進します。簡単ではございますが、以上をもちまして受賞の挨拶とさせていただきます。

受賞作

『南シナ海問題の構図—  
中越紛争から多国間対立へ』

しょうじ ともたか  
庄司 智孝

(防衛研究所地域研究部長)

このたびは、大平正芳記念賞という荣誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。財団の関係者の方々と選考委員の先生方に対し、貴重なお時間を割いて拙書をご検討いただいたことに心より感謝申し上げます。

本書は、南シナ海問題をテーマとしています。この問題は、現在米中対立の焦点になっていますが、そもそもは南シナ海の海域や島々をめぐる、東南アジア諸国と中国、そして台湾の間の領有権争いです。現状、米中対立がクローズアップされることで東南アジアの存在がかすんでしまっていますが、問題の歴史的経緯と端緒、そして私が専門とするベトナムの対応策を学術的にとらえるため、自らの学識を総動員してこの本を書き上げました。私の狙いがどの程度実現したか、読者の方々の判断にゆだねる部分も大きいかとは思いますが、南シナ海問題の歴史をとらえて概括し、1つの見方を提示することには成功したのではないかと考えています。南シナ海問題は現在も続いており、かつますます複雑化しており、解決の展望は見えていませんが、そもそもこれはどういう問題なのかについて学術書としてしっかりと残しておく、という務めは果たせたのではないかと自負しています。現在進行形の安全保障問題を学術的に扱うことには固有の難しさがありましたが、何とか実現することができました。そこにはさまざまな人からの助けがありました。

本書は、大学教員である妻の支援なくして完成させることはできませんでした。また職場の同僚や国内外の研究仲間との議論によって、多くの貴重な示唆を受け、南シナ海問題の考察を深めることができました。

名古屋大学出版会の三木信吾氏への謝意は言葉では尽く

---

せないほどです。氏は、メールで初めて連絡した時から本書のテーマに関心を示し、本の完成までじっくりとおつきあい下さいました。また筆者に耳の痛いコメントも折に触れ率直に伝えていただきました。三木氏のご支援なくして、本書を世に問うことはできませんでした。心より御礼申し上げます。

この度の受賞を大いなる励みとし、専門性を磨きつつ、またより広い視野と関心を持ちながら、今後とも研究に精進してまいります。ありがとうございました。

---

受賞作

『「地球社会」時代の日米関係 —  
「友好的競争」から「同盟」へ 1970-1980年』

ちょう ふみたか  
長 史隆

(立教大学法学部兼任講師)

この度は、名誉ある大平正芳記念賞を賜り、光栄に存じます。財団関係者の皆様および審査の労を取っていただいた先生方に、深甚の謝意を申し上げます。

本書は、1970年代における日米関係の展開を明らかにするものです。その時代には、西側陣営内での相互依存が深化するとともに、様々な国境横断的課題が噴出し、「地球」を1つの単位と捉える世界認識が次第に広がりました。そのような時代思潮を重視しながら、本書で私が試みたのは、安全保障問題を中心とする伝統的な2国間の政治・外交関係にとどまらず、グローバルな視座に立ち、難民、文化、動物の命といった社会・文化的な側面をも重視することで、新たな国際関係史のあり方を提示することでした。

また本書は、その時代の変化や課題に向き合った人々の群像劇でもあります。なかでも、私が最も重視し、本書を

通じて主要な登場人物となったのが、大平正芳その人です。大平は、この時代に顕在化した様々な課題に最も誠実に向き合った人間の一人でした。例えば彼は、日本がインドシナ難民問題への対応に迫られた1979年7月にNHKの番組で次のように語っています。「こんなに地球が狭くなりましてね、相互依存がこんなに高まってきた時に、こんな態度でいいのかということを確認に、日本も考えなければいかんと思うのですが〔中略〕。諸国民が日本に定住されて、しかも、チャンと暮らしていけるというデモクラチックな国であってほしいと思いますけれどもね。何かまだとても距離がありますね。だから、じっくり時間をかけて日本の経済ばかりでなく、日本の生活自体の国際化というのは考えて行かないと」。現在の日本社会は、この時からどれほど歩みを進めたといえるのでしょうか。昨今、人々の口の端に上るようになった「多様性」や「インクルージョン」といった言葉も、ともすれば空疎なスローガンとして消費されている気配なしとしません。はたして今を生きるわれわれは、社会のあるべき姿についてどれほど誠実に思索しているのでしょうか。大平正芳の知的営為に接するにつけ、肅然と襟を正す心持を抱くのは、ひとり私だけではなからうと存じます。

---

受賞作

『外務省と日本外交の1930年代 —  
東アジア新秩序構想の模索と挫折』

ゆかわ はやと  
湯川 勇人

(広島大学人間社会科学研究所法科学・政治学プログラム准教授)

名誉ある大平正芳記念賞を賜り光栄に存じます。財団の関係者の皆様、選定委員の先生方に感謝を申し上げます。

---

拙著『外務省と日本外交の1930年代：東アジア新秩序構想の模索と挫折』は、2017年1月に神戸大学に提出した博士論文を基にしています。私が博士号を取得した頃、近い年齢の研究者たちは、続々と単著を刊行しておりました。その一方で、私は本書を世に送り出すまで、そこから5年もかかりました。その間、焦りがなかったと言えは嘘になります。しかし、多くの方々に博士論文の内容についてコメントを頂き、それらを参考に原稿を加筆修正していくなかで、面白いものになっているという手応えも確かにありました。この度、大平正芳記念賞を受賞できたことで、この5年間の歩みに間違いはなかったことが確認できたので、今後も、自信を持って研究活動を続けていくことができます。

本書が取り扱った1930年代の日本外交は、非常に複雑で一面的に理解することは不可能です。だからこそ、これまで多くの研究者が、あらゆる角度、視点から研究に取り組んできました。そうした優れた先行研究に拠りつつ(あるいは寄りかかりつつ)、本書は、1930年代の外交官たちが、どのような東アジア新秩序の構築を目指したのかを検討しました。その帰結は、地域の文化や多様性のもとで共生と繁栄を目指した大平正芳元首相の環太平洋構想とは似ても似つかないものです。ですが、1930年代の外交官がそうであったように、あるいは大平元首相がそうであったように、東アジアの大国として地域秩序の担い手であろうとした意識は、近代以降の日本外交に通底しています。この度の受賞によって、本書が1930年代の日本外交を知るための一冊のみならず、より広い視点で日本とアジア・太平洋諸国の関係性の歴史を知るための一冊として位置づけて頂けるようになれば、この上ない喜びです。

受賞作

『世界史のなかの東南アジア—  
歴史を変える交差点』

太田 淳・長田 紀之・  
青山 和佳・今村 真央・蓮田 隆志

このたびは荣誉ある大平正芳記念賞特別賞を受賞し、たいへん光栄に存じます。大平正芳記念財団、本賞選定委員会、名古屋大学出版会、および本書の刊行にご助力頂いた全ての方に厚くお礼申し上げます。

本書は、80年代からこの分野を牽引するアンソニー・リード氏の近著である東南アジア通史を翻訳したものです。リード氏は各国別政治史を中心とするそれまでの東南アジア史叙述と決別し、さまざまなテーマに基づいて国境を横断しつつ、地域全体の経済や文化を分厚く描き出しました。本書では、気候や災害、商業などに加えて、男女の役割分担、非国家社会、表演(パフォーマンス)―書かれた文芸と対比される、踊り、詠唱、演劇、音楽など―といった、従来の歴史叙述からこぼれ落ちていたテーマが取り上げられます。これにより、たとえば東南アジアでは強大な国家が発生しにくかったことが環境や生業から説明され、国家の支配を逃れる社会も貿易などを通じて各地とつながっていたと述べられます。また、地域の言葉による表演は、ネーションの形成につながるものであったと議論されます。リード氏によれば、こうした歴史を学ぶことには明確な意義があります。これからの人類は環境と調和し、男女の均衡を保ち、国家に過剰に依存しない生き方が必要となるため、こうした特徴を持つ東南アジアの歴史はあらゆる人びとにとって将来の参考になるのです。

このように幅広いトピックを扱う原著の翻訳は、至難の業でした。私たち訳者チームはメールや合宿での議論を通じて多くの問題を検討しただけでなく、16名にもおよぶ各地域・分野の専門家に助言を求めたことに加え、リード氏本人にも120を超える質問を送り、さらに5名の方に出来上がっ

---

た原稿を通読しコメントして頂きました。ご協力頂いた方に感謝するとともに、私たちの取り組みは学術書翻訳に一つのモデルを打ち立てたとも自負しています。今回の受賞を通じて、本書がさらに幅広い読者を得られることを願います。(太田 淳)

---

受賞作

『中国共産党の歴史』

たかはし のぶお  
**高橋 伸夫**

(慶應義塾大学法学部教授)

このたびは、名誉ある大平正芳記念賞特別賞をいただくことができ光栄に存じます。財団関係者の方々、選定委員会の先生方、本書の出版をご支援くださった方々に心より御礼申しあげます。

中国共産党は1949年に内戦に勝利するまで、いつ頓死したとしてもおかしくはありませんでした。1927年、1934年、1941年—このいずれかの年に、組織が消滅しても不思議はありませんでした。したがって、同党の百年は、なぜか生き延びた政治組織が全国的権力を握り、大躍進や文化大革命など極端な事業に手を染めた後、やがて世界最大の政党となってグローバルに影響力を行使するに至る物語です。

極端さこそが中国共産党の運動の特徴です。それは中国革命を世界革命の一部にしようとする、さらには前者に後者を先導させようとする指導者たちの願望のもとで、「上から」の要請と「下から」の熱狂が共鳴したために、革命の事業が「暴走」をはじめ、急進的な性格を帯びたからです。この特徴は、習近平の時代にも失われてはいないように思われます。

翻って、日本人の中国共産党をみる眼もまた極端であるよ

うにみえます。日本人にとって、同党は1970年代に至るまでは希望の星であり、それ以降は悪魔となりました。しかし、この政党の成長過程をたどるなら、この組織が何度となく、その性格を大きく変貌させてきたことがわかります。1920年代、この「革命政党」は地主や富農や匪賊を自己の隊列に引き込んでいました。40年代にはアヘンの生産にも手を染めました。50年代にはソ連を社会主義のモデルとして崇拜していたのに、60年代にはそれと決裂しました。70年代には帝国主義の親玉であるアメリカと手を結びました。そして80年代以降は、資本主義を体制原理のなかに組み込みました。したがって、いまわれわれがみている中国共産党の姿が、この政治組織の最終形態であるとみなすことはできません。われわれにもまた思考の柔軟性が求められています。

本書が中国共産党を長い時間的展望において考える際の手がかりとなれば幸いです。

---

## 〔学術研究助成費〕

個人研究

『『小国』の勲章外交—琉球・ハワイ・大韓帝国』

もり ま ゆ こ  
森 万佑子

(東京女子大学現代教養学部国際社会学科国際関係専攻准教授)

この度は、第37回環太平洋学術研究助成費に、研究テーマ『『小国』の勲章外交—琉球・ハワイ・大韓帝国』をご選定いただき、誠に光栄に存じます。大平知範理事長をはじめ大平

---

正芳記念財団の関係者の皆さま、および選定委員の先生方に、この場をお借りして、深くお礼を申し上げます。

私は、博士論文をまとめた『朝鮮外交の近代—宗属関係から大韓帝国へ』(名古屋大学出版会、2017年)で、第35回大平正芳記念賞を受賞しました。賞を授けていただいたお陰で、多くの方々に拙著を知っていただきました。なかでも、拙著が中央公論新社の白戸直人さんの目にとまり、次の作品である『韓国併合—大韓帝国の成立から崩壊へ』(中公新書、2022年)につながったことは、望外の喜びでした。

お陰様で『韓国併合』は多くの方々に読んでいただくことができ、たくさんの書評やコメントもいただきました。その中で、近代イギリス政治外交史がご専門でイギリス王室に詳しい君塚直隆先生から、今回の研究テーマにつながる勲章外交のアイデアをいただきました。「小国」の勲章外交をキーワードに、「小国」の独立や併合の意味を再考し、そこから東アジアにとどまらない環太平洋を含む広い視野で世界史を捉え直すことは、たいへん面白そうだと直感しました。というのも韓国併合を研究していると、どうしても細かな史実に目が行き、当時の世界史の動態を見失いがちだったからです。

2023年6月現在、日韓関係は、岸田文雄総理と尹錫悦大統領によって関係改善に向けたダイナミックな取り組みがみられます。ただ、依然として、韓国では歴史問題で日本に対して厳しい見方があることも事実です。

私は、韓国近代史を専門としつつ、朝鮮半島の地域研究者として、史実を精確に調べるとともに、環太平洋を含む広い視野で「小国」からみた世界史を描きたいと思います。本研究が、ミクロとマクロの両方の視点から歴史像を提供することで、日韓の歴史問題について多面的に議論しながら互いの信頼を深め、未来世代のために揺るぎない日韓関係を構築していく一助となれば幸いです。

●贈呈式及び記念パーティ（ホテル・グランドヒル市ヶ谷）

39回 大平正芳記  
37回 学術研究助



大平裕様の挨拶

回 大平正芳記  
回 学術研究助



平将明様の挨拶と乾杯



太田淳様、末廣昭様



高橋伸夫様、金子芳樹様



Jackie Imamura 様、今村真央様、長田紀之様  
光成歩様、太田佐和香様



森万佑子様とご両親



岡田裕志様、鈴木岩男様、渡辺利夫様、  
川崎正幸様、田岡敬造様、清水茂昭様



末廣昭様、太田淳様、太田佐和香様、  
木村福成様



日下一正様、長央隆様、石井由梨佳様、  
木村福成様



岩成真一様、堤恒一郎様、青山和佳様  
末廣昭様、金子芳樹様



久保文明様、長央隆様



日下一正様、久保文明様



川崎正幸様、田岡敬造様、大平明様、  
岡田裕志様



齊田晴一様の挨拶

## 風信・来信

### ● 清華大学関係者とのシンポジウム開催

中国清華大学元総長・邱勇先生と清華大学日本研究センターの先生方が来日し、5月8日「大平正芳と日中関係学術シンポジウム」が開催されました。



清華大学からは15名の参加、当財団監事の福川伸次氏、NIRA 総研より理事・宇野重規先生、神田玲子様、当財団理事の大平裕、事務局の海野哲壽が出席しました。

冒頭、福川伸次氏、邱勇先生から「大平正芳の政治思想とそれを活かした日中関係進化へ」とのテーマでのスピーチがありました。

今後も、大平思想の日中関係への期待、日中関係進化への検討課題など、互いに研究、検討していくことになっております。

### ● 近藤茂氏、「給排水設備研究」に特別寄稿

「給排水設備研究」（給排水設備研究会）2023年7月号に近藤茂氏が連載している「水の循環、空気の循環」の第11話の中で「大平正芳元首相の田園都市国家構想を実行しよう！」として次のように提言されています。



「都市に田園のゆとりを、田園に都市の活力を」をキャッチフレーズとしたこの報告書（田園都市研究グループ報告書）の基本的な趣旨は、「都市」に象徴される現代文明や市場経済と、「田園」に象徴される「地域」「地方」「自然」などの調和、あるいは後者の復権を目指すものとして良いが、その場合特に「人間」「文化」の役割が強調されている点が大事だと思います。

経済成長をもたらす活力の源泉としての「都市」の発展と、ゆとりをもたらすべき「田園」と「家庭」と「文化」の保全是、ともに、21世紀日本にとってのもっとも重要な課題であり、その両立しがたい二つの課題をどうやって解決するか。大平元首相の田園都市国家構想はこの点に関するヒントに満ちており、人口減少を止め、明るい日本の夜明けになるのではないのでしょうか。

### ● 倉田徹 英国で香港の政治情勢を取材

香港の政治情勢は今も厳しく、コロナ禍もあって3年以上海外出張もできない状態が続き、研究は滞りがちでしたが、この夏休みに

久しぶりに出張に行くことが出来ました。英国で、香港から移住した人々の生活状況について聞き取りをしたり、香港研究の拠点を築くための努力をしている大学を訪問したりしました。厳しい環境の元でも、前向きに、地道に頑張ろうとしている人たちと話をすることができて、大分勇気づけて頂きました。私も彼らに負けないように、ネジを巻き直して頑張ろうと思います。(第38回受賞者)



### ●木宮正史 韓国外交史料の分析に基づく韓国外交史研究に取り組む

コロナ禍も収束して、韓国との交流もコロナ以前のように活発になってきたために、私が主たる研究対象とした、韓国外交史料の分析に基づく韓国外交史研究に再び取り組むことができるようになった。特に、1980年代は、北朝鮮に対する体制優位、さらに、冷戦の終焉に向けた激動の国際関係の中で、70年代までは冷戦に制約されていた韓国外交の地平が飛躍的に拡大する、非常に興味深い時期でもあり、こうした韓国外交のダイナミックな変化を一次史料に基づき解明する作業に取り組んでいる。そして、同時期の日本外交が韓国外交とどのような関係を持ったのかも合わせて解明することにも取り組んでいる。なお、授賞図書『日韓関係史』の韓国語版も出版された。(第38回受賞者)

### ●高口康太共著 『点検 習近平政権 長期政権が直面する課題と展望』文眞堂、2023年



2020年から3年間にわたり往来が途絶えていた中国だが、相互に旅行できるようになった。コロナの間も社会経済は停止したわけではない。特に新興国である中国はなお早いペースでの成長、成熟を続けている。今年2回にわたり、中国に渡航する機会があったが改めて感じた次第である。

私の仕事も往来が途絶えていた間はリサーチや電話取材が中心であったが、ようやく現地の肌感覚を楽しめるようになった。物書きとしての醍醐味でもあり、ようやく本来の仕事を再開できたという喜びが大きい。

2023年に出版した書籍：遊川和郎・湯浅健司編著『点検 習近平政権 長期政権が直面する課題と展望』文眞堂。「第8章 世代交代進む中国のIT企業」を担当。(第37回受賞者)

### ●李貞善 「2022年国際軍事史学若手研究者賞」受賞

2023年2月16日 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻博士学位を取得しました。学位論文：『記憶の場としての国連記念公園：戦争墓地の文化遺産化』。

この博士論文に基づいた研究論文が国際学術出版社(BRILL)および国際軍事史学会の「2022年国際軍事史学若手研究者賞」受賞しました。

2023年4月～2024年3月、東京大学大学院人文社会系研究科・研究員になり、研究にいそしんでおります。(第36回環太平洋学術研究助成費受賞者)



### ●芹川洋一著『宏池会政権の軌跡』日経プレミアシリーズ、2023年

現存する自民党最古の派閥、宏池会が生んだ5つの政権を通じ戦後政治の軌跡を描く。この5つの政権はすべて時代の激動期に直面し、政治のギアチェンジを担ってきた。宏池会政権の軌跡をたどり、戦後日本の政治の歩みを振り返る。



### ●『大平正芳の中国・東アジア外交—

#### 経済から環太平洋連帯構想まで』(仮題) 本年未発刊

近年、大平正芳の政治思想が再注目されているが、戦後の日本外交史を巨視的に捉えた上で「大平外交」の位置づけを論じ、その思想・理念のみならず事例研究等を含めて、日中関係史、特に中国やそれ以外の視点からも「大平外交」を捉えようとする書籍『大平正芳の中国・東アジア外交—経済から環太平洋連帯構想まで』(仮称)を2023年末に発刊する。合計13名の執筆者による論文集であり、東京大学大学院総合文化研究科・川島真教授、慶應義塾大学法学部・井上正也教授にて、現在、編纂作業を進めている。

### ●大平正芳記念財団へのご寄附者名

【100万円】(株)桃李(齊田晴一様)、【50万円】鈴木岩男様、田中義久様、【40万円】片桐陽様、【20万円】小泉達也様、【15万円】北野谷惇様、【10万円】かんべ土地建物(株)(神戸雄一郎様)、(株)ジンコミュニケーションズ(雨宮慎一様)、千里浜カントリークラブ、早川運輸(株)(早川正雄様)、この他220名の個人・団体の方々より御芳志をいただきました(順不同、2022年9月～2023年8月)



「大平正芳記念財団レポート」第41号  
発行・公益財団法人大平正芳記念財団  
発行人・大平 知範

2023（令和5）年9月発行

〒102-0082 東京都千代田区一番町 22-4 一番町館 202号  
電話 (03) 3230 - 2213 FAX. (03) 3230 - 2214  
URL : <https://www.ohira.org/>

THE MASAYOSHI OHIRA MEMORIAL FOUNDATION

Ichibanchokan,202  
22-4, Ichibancho, Chiyoda-Ku, Tokyo,  
102-0082 JAPAN

Tel. +81 (Japan) 3-3230-2213

Fax. +81 (Japan) 3-3230-2214

URL:<https://www.ohira.org/>

